



当寺は一二九三年(正徳元年)一向土人の名により開かれた。藤沢の遊行寺を本山とする。本尊は阿弥陀如来(正徳二年一七二二の造立)。他に三体ある本像は、もと法華堂(吾妻鏡に云う頼朝の持仏堂の後身で、「八幡宮寺」の管轄下にあった。現在頼朝の墓のある地がその史蹟として指定されている)に安置されていたが明治初年神仏分離令により、それが廃せられたので手洗石、鵜口、双盤

(共に在銘)と共に当寺に移された。以下三像につき略記する。

(一) 如意輪觀世音像(神奈川県重要文化財) 如意輪像は古くは二臂に作られたが、真言系では普通六臂で右第二手に如意宝珠、左第三手に法輪を捧げるため如意輪と云う。半跏の姿勢および六本の手の位置と持ち物は決っている。当寺の像はほぼ等身大。高く三段に結んだ宝髪、二段に垂れた衣の裾等に宋朝様式が見られる。寺伝では尼將軍政子の持仏であったとしているほか、由比長者の伝説もからんでいるが、様式上、その他から、南北朝の制作と見られている。吾妻鏡に建暦元年、時の御台所が如意輪觀音を念持仏とした旨を記しているのはこの地における如意輪信仰の伝承の一端を示すものであり、当寺の像も日常の厄よけ、また婦人の守り本尊、殊に安産の守護尊として信仰され、御影札には「安産守護」の印が押される。

正月、五月、九月の十七日には觀音法会が行われ、参詣者で賑わう。

さて、この像で忘れてはならないのは衣文に見られる大小の土文である。上文と云うのは粘土、漆等を混ぜて型で抜き、貼りつけたものらしく、刺繍の文様を立体的に表現したものと考えられ、その極彩色であった当時の美しさがしのばれる。現在鎌倉でも土文を残している仏像は九体を数えるに過ぎない。

(二) 地藏菩薩像(神奈川県重要文化財) この像は五山文学に不朽の名を残した瑞泉寺三世義堂周信(のち勅命により京都南禅寺に住した。ために南禅寺は京都五山十刹の上に位置した)が応安四年(一三七二)に聞いた報恩寺の本尊で、永徳四年(一三八四)宅間浄宏作と考られている。朽木座上に抬げられ、垂下する衣文の写実的なひだ、八の字に開かれた袖等は宋朝様式の典形であり、建長以降の仏像、頂相に顕著な様式で、最も鎌倉的なものと云うべく、制作が極めて優れている点でかつその年次の明かな点、この時代の指標的作例として注目されている。その人間的な、そして深い理智をたたえた面差しは「人間そのものが仏なのだ」という禅宗の思想を見事に具象化し得たものというべきであろう。なお、埼玉県下川にこの像に酷似する地藏像が伝えられているのは注目し得る。

(三) 技陀婆羅(バツタバ) 尊者像 俗に「自体さま」と呼ばれ、江戸時代には江の島の稚児が潮の伝説の主人公と考えられていた。その出身地が今の福島県信夫郡なので福島県磐梯線の遊覧バスガイドによつて今も語られる伝説である。然し像様から考えると、円覚寺藏で雪舟の愛弟子宗洵が画いた重文「技陀婆羅尊者(禅宗の浴室の主尊)像」或いは京都南禅寺の板絵の同尊像に酷似するほか、三山進氏の考証によりは、旧報恩寺の技陀婆羅像と考えられるに至り、彫刻として極めて稀でもあるので、昭和四十九年鎌倉市の重要文化財に加えられた。この像に折ると、足腰の痛み、頭痛、目の病いが去ると信じられていたのも浴室の主尊としての性格が記憶されているのかも知れない。